

## 視覚障害と知的障害を併せ有する女兒との相互的コミュニケーションの促進 に関する事例的研究 —身体接触を伴う活動を通して—

高橋 沙知

### I 問題

梅津 (1978) は「A, B二者のうちAの特定の行動が何らかの仕方でBに影響を及ぼしてBが特定の行動を起こすとき、両者の間にはコミュニケーション関係がある」と述べている。

とくに視覚障害を伴う子どもと相互的なコミュニケーションを促進していく場合、視覚チャネル以外の感覚チャネルを通しての非言語的な交信関係をいかに豊かにしていくかが課題となる。その中の一つのチャネルとして、身体接触がある。モンタギュー (1977) は、身体接触から感じ取れるものは単なる皮膚への圧力ではなく、その相手は自分のことをどう「感じて」いるかを示すメッセージである。子どもは皮膚と自己受容器の両方で自分を抱く人の筋肉・関節・靭帯の動きからメッセージをうけとることができると述べている。

以上のことから、身体接触は、ただ単なる皮膚への圧力ではなくコミュニケーション・チャネルとなり、能動的・自発的に他者に対して働きかけやすいコミュニケーション手段であると考えられる。また、和田(1996)はコミュニケーションにおいて重要な要素となる非言語的行動として8つの観点を示しているが、「関係遊び」は、⑤の「接触」(触れる、抱き合う)を始めてとして②の「体の動き」、⑥の近言語などをコミュニケーションの手段として用いることが可能となる。

このような身体接触を伴う対人的相互交渉には、感覚統合法や臨床動作法などが展開されているが、シェルボーン(1993)は、身体接触を伴う活動を実施し、人間は「他の人との相互関係を形成したいニーズ」をもっているという結論に達したと述べている。さらに川住(1994)は、子どもたちと相互関係を促進するため「関係遊び」を参考にして独自の実践研究に取り組み対人関係の向上を促したと報告している。シェルボーンの「人間は相互関係を形成したいニーズをもっている」とい

う考えの仮説に立てば、外界への働きかけが微弱であり、自分の意図や要求を人に向かって発現することが乏しいとみられている重度・重複障害児は、相互関係を形成したいニーズが十分に満たされていないと考えられる。

### II 目的

本研究の対象児となっている M は視覚障害を有しており、周囲の状況や様子を把握しにくいいため、強い不安感を抱きやすい。そこで、身体を動かすことが好きな M と身体接触を伴う活動を取り組むことによって、M の情動表出を促進し、相互的コミュニケーションを促進することが必要である。そこで本研究では、M とかかわり手が相互的コミュニケーションを促進するために、身体接触を伴う運動活動を実施し、その有効性について検討することを目的とする。

### III 方法

#### 1 事例対象児

現在、盲学校小学部1年に在籍する女兒 M。視覚障害(全盲)と知的障害を併せ有している。

#### 2 手続き

資料収集は、A 教育大学障害児教育実践センターにて行い、2006年の2月から同年の7月までに実施した計18回(1回/1~2週)の継続的なかかわりを資料収集の期間とした。かかわりの方針として、かかわり手が一方的に活動を展開するのではなく、M と一緒に活動を楽しみながら展開していくこととし、その活動の中での M とかかわり手のやりとりを相互的コミュニケーションとした。

さらに、シェルボーン(1993)及び川住(1994)を参考に、身体接触を伴う運動活動の12種類の活動を取り組んだ。運動活動はかかわり合いの中で試行しながら M に受け入れられるか否かを探っていくこととし、活動の内容によっては声の調子を変えながら、絶えず言葉をかけるように工夫しておこなった。さらに M の動きに応じて、働きか

けを変えていくこととした。また、M の起こした行動を確認 (表出確認) することを意識的に行いながら取り組んだ。

### 3 資料収集の方法と分析の視点

1) 本研究における〈身体接触を伴う活動〉において、かかわり手に向かった対象児 M の身体表出の変化について検討については、身体接触を伴うかかわりの中で、M からかかわり手に向かった表出 (手の動き) については、マイクロ分析によって触れた回数をカウントする。

2) 相互作用の様相を分析することにより相互的なコミュニケーションを促進する要因について検討については、M とかかわり手の相互作用成立状態と相互作用成立水準をコミュニケーション単位 (CU) とインタラクション単位 (IU) (三宅ら, 1974) により把握し、抽出した 3 つの運動活動場面を抽出し、相互作用成立状態 (伊藤ら, 1999) を分析する。相互作用の成立状態を A 水準 (相互作用成立状態)、B 水準 (相互作用成立寸前状態)、C 水準 (相互作用不成立状態) に分け、さらに行動の開始者が M から (I 型)、かかわり手から (II 型) によって 3 水準 6 型に整理した。

## IV 結果

### 1) M からかかわり手に向かった表出について

身体接触を伴う運動活動の中でかかわり手に向かった手の動きは、10S 以上に渡って継続的に実施した「横揺れ」「揺れ木馬」については、セッションを重ねる毎に、かかわり手に向かう手の動きが増加した (60 秒あたり)。その他、途中から取り入れた「馬」「お腹を叩く」「肩から一回転」については、セッション毎によってかかわり手に向かった手の動きの回数にばらつきが見られた。さらに、S8 あたりから M から「顔」に向かって手を伸ばす手の動きが見られるようになった (図 1-3)。

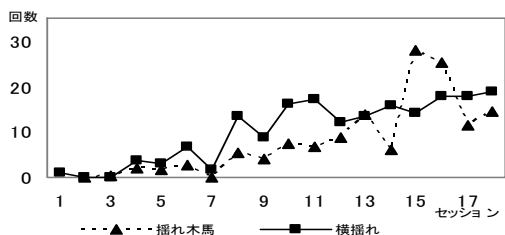


図 1-1 かかわり手への表出の推移：継続して行った活動

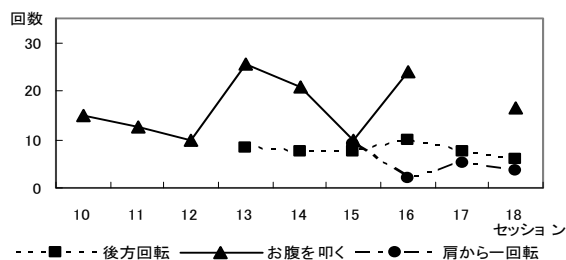


図 1-2 かかわり手への表出の推移：途中から取り入れた活動

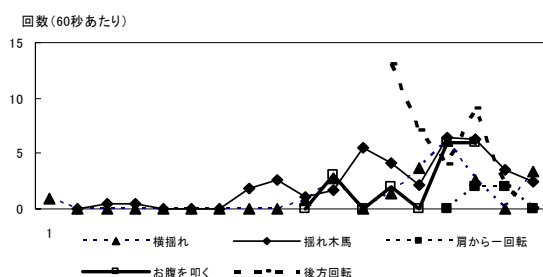


図 1-3 かかわり手の「顔」に向かった手の表出

### 2) M とかかわり手の相互作用について

M とかかわり手の身体接触を伴う活動中の相互作用については、どの運動活動もセッションを重ねるごとに、A 水準 (相互作用成立状態) が増加するに反比例して C 水準 (相互作用不成立状態) が減少していった。また、相互作用の型がすべてのセッションにおいてやりとりの開始はかかわり手である I, III, V の型であり、M からやりとりを開始させる II, IV, VI の型は見られなかった。

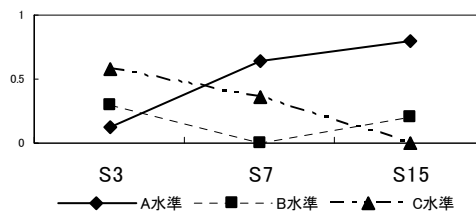


図 2-1 「揺れ木馬」の相互作用の推移

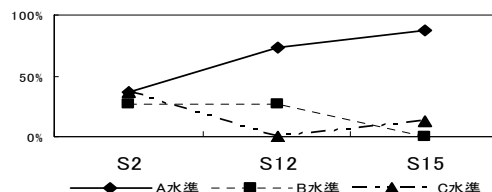


図 2-2 「横揺れ」の相互作用の推移

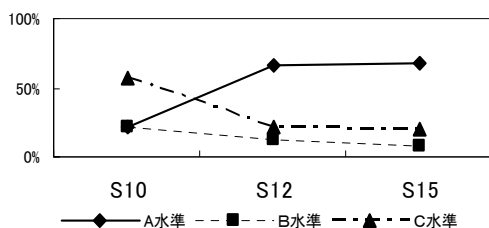


図 2-3 「馬」の相互作用の推移

## V 考察

### 1 M からかかわり手に向かった表出について

身体接触を伴った運動活動を展開していく中で M からかかわり手に向かった表出 (手の動き) が増加したことは、小さい頃「触れる」ことに対して拒否していた M が、かかわり手に向かって手を伸ばしたり、手を重ねたりする行動には、かかわり手に対しての M の自発的・能動的な探索といった意味をもっていると考えられる。

また、M は母親に接近する場面で、まず母親の顔に手を伸ばして確かめるというような探索的な行動が見られていた。かかわり手との間においても、セッションを重ねるにつれてかかわり手の「顔」へ向かって手を伸ばし、顔や口、頬などを探索的に触れる様子が見られるようになった。これらの表出は、M とかかわり手が身体接触を伴っている活動を一緒に楽しみながら展開したことによって、わずかな表出に対しても身体を通してやりとりを行うことができたことによってやりとりが促進し、M とかかわり手との間に信頼関係が生まれ、かかわり手への意図的な表出がみられたのではないかと考える。

### 2 M とかかわり手の相互作用について

かかわり手に向かった表出 (手の動き) が増加するにつれて、A 水準の相互作用成立水準が増加するといった関係性を見出すことができた。身体接触を伴いながら M とかかわり手が一緒に活動に取り組んだことによって、さまざまなコミュニケーション・チャンネルを用いて M とかかわり手のやりとりが促進し、関係が深まった結果であると考えられる。また、M とのやりとりで相互作用の型は A-II、B-IV、C-VI しか見られず、これは行動の開始がすべてかかわり手である II 型であった。こ

れは、M が十分に自分の意図や要求を発現できていないということも考えられるが、障害が重い子どもとのコミュニケーションにおいて、土谷 (2000) は初期的コミュニケーションが相互的になっていくか否かはかかわり手の受け方が大きく関与していると述べていることから、相互的なかかわり合いを発展させていくためには、かかわり手の受け方が重要であることも示している。

### 3 全体考察

本研究において、笑顔や発声、手足を動かすなどの情動の表出やかかわり手に対する接近行動が見られるようになった。また、かかわり手に向かった M の手の動きが増加し、相互作用 A 水準のやりとりも増加がみられた。このことから、M にとっても身体接触を伴う活動は、喜び満ちた活動であり、両者にとって「楽しい」活動を展開することで、相互的なコミュニケーションを促進し、やりとりを活発にさせる上でのきっかけとなり、そこから、活動が広がっていったと考える。また、身体接触を伴いながらさまざまなコミュニケーション・チャンネルを使い、一緒に活動を行うこと通して、やりとりが促進し関係が深まったことも要因であると考えられる。

また、声掛け等によって状況が伝わることや、かかわり手と常に身体が接触していることによって、「分りやすい活動」であることが M の表出を引き出すのに有効であったと考えられる。

## 文献

- 川住隆一(1994)運動活動に基づく「関係あそび」を通しての重度・重複障害児の係わり手の相互交渉. 国立特殊総合研究所研究紀要, 21, 51-58.
- モンタギュー, A. (1977) タッチングー親と子のふれあい. 佐藤信行他訳, 平凡社.
- シェルボーン, V. (1990) シェルボーンのムーブメント教育入門ー発達のための新しい教育指導法. 関口美佐子他訳, 三輪書店.
- 土谷良巳・菅井裕行(1998) 盲ろう二重障害における初期的な人との係わり合いー相互的「やりとり」としての対話に至る経緯について. 国立特殊教育総合研究所研究紀要, 25, 83-98.
- 梅津八三(1978) 各種障害事例における自成信号系活動の促進と構成信号系活動の形成に関する研究. 教育心理学年報, 17, 101-104.
- 和田実(1996) 非言語的コミュニケーションー直接性からの検討. 心理学評論, 39(2), 137-167.